

◇豆子名誉会長「書道あれこれ」



私も書道遍歴を少し話すと、私は十九歳から書の指導を始め、生徒は海軍将校（彼らには辞世の書き方の手本を）、宝塚月組書道部、また日活宣伝部で映画の題字を書いたりもした：きりが無いのでこの辺で。今日は、「穿石一言録」に基づいて書を学ぶ根の部分について話したい。立派な製本をして下さって松浦先生に感謝します。さて、◆本場に書に対する自分の眼は確かか、もう一度考えてほしい。眼を肥やす方法の一つとして、身銭を使って先人の良いものを収集するのも一手。人の書

が判ってこそ自分の書も判る。書学の第一歩である。◆一本の線も二度と同じに引けない。線が濁る。二度と引けないから毛筆は筆跡鑑定ができる。線質が書品の根本。例えると絹と化繊の違いを見分けるようなもの。柄（書では形）ではない。手本によって師の形に似せられても、線質は同じに出来ない。大字はそれが特にはつきりして難しい。◆書は技を学ぶのみでない。小手先の事でなく、「書とは何か」を学ぶ事である。手島右卿先生は、「書という生き物を創る事を学ぶ事」と述べられている。生きている書、普遍性を持った書とは？師が在れば一度訊いてみて下さい。◆書の階段は定かでなく、転んでも気付かない。やり方によっては誰しも上達する訳でなく、一步一歩過程を着々と踏んで実力を蓄え

ねばならない。◆師を選ぶ事は医者を選ぶと同じに難しい。一度ついた以上は師を乗り越える覚悟も要る。どう選ぶかは、良く人の集まっているが矢張り良い。◆一見すると下手に見えるものも、よくよく鑑賞すると良さが判る事も。鑑識眼が必要である。一流の良さが一度判ると離れられなくなる。本当の芸術はやはり素晴らしい。一般大衆は引つ張られ易いが、一時の人氣・迎合は駄目だ。◆何の為に今、自分が書を書いているか。今この宇宙で自分の人生を考え

紙面の都合で石黒様の書作品の表装についてのお話が掲載で



ながら書いて欲しい。この機会無くしてこの書は書けないんだと思つて取り組んで欲しい。全身全霊で書き残す事に意味がある。入賞に拘るばかりなど愚の骨頂である。◆緊張し過ぎず心を整え、大きな気分で筆をとる事である。五輪の選手にも言いたい。メダルなど関係ない。一杯の自分を發揮すれば良い。書も同様だ。◆書は水を用いる。食物もそうだが、腐らぬうちに用いるのが第一で、よつて書に生命が宿るといふ事である。（以上）

きなかつたが、作品の姿に直結するテーマを、具体的に実物を示して詳しく講義してください、今後の制作に大いに役立つ知識を戴くことができました。心より感謝申し上げます。研修局の先生方には、有意義な企画・運営を本当にご苦労様でした。